



目崎徳衛

数奇と無常

吉川弘文館

目崎徳衛

数奇と無常

吉川弘文館

著者略歴

大正十年 新潟県生れ

昭和二十年 東京大学文学部国史学科卒業

昭和四十年 文部省教科書調査官

現在 聖心女子大学教授・文学博士（東京大学）

現住所 359所沢市中新井五―七―十三

主要著書

紀貫之―人物叢書（昭和三十六年 吉川弘文館）

平安文化史論（昭和四十二年 桜楓社）

在原業平・小野小町（昭和四十五年 筑摩書房）

漂泊―日本思想史の底流―（昭和五十年 角川書店）

王朝のみやび（昭和五十三年 吉川弘文館）

西行の思想的な研究（昭和五十二年 吉川弘文館）

西行―人物叢書（昭和五十五年 吉川弘文館）

百人一首の作者たち―王朝文化論への試み―

（昭和五十八年 角川書店）

侍中群要（校訂・解説）（昭和六十年 吉川弘文館）

数奇と無常

昭和六十三年十一月二十日 第一刷印刷
昭和六十三年十二月一日 第一刷発行

定価 一、八〇〇円

著者 めざきとくえ 目崎徳衛

発行者 吉川圭三

発行所

株式会社 吉川弘文館

東京都文京区本郷七丁目二番八号

郵便番号 一一三

電話 〇三―八一三―九一五一（代表）

振替口座東京 〇―二四四

印刷 平文社 製本 ナショナル製本

数奇と無常

目次

第一 西行点描 1

一 北面佐藤義清とその遁世 3

二 西行における地方と庶民 22

三 西行と「越のなか山」 49

四 西行の詠わなかったもの 55

五 神宮と西行 60

——「なにごとのおはしますをば」歌の背景——

六 西行の虚実 68

第二 数奇と無常 89

一 遁世における数奇と無常 91

二 美意識における無常 115

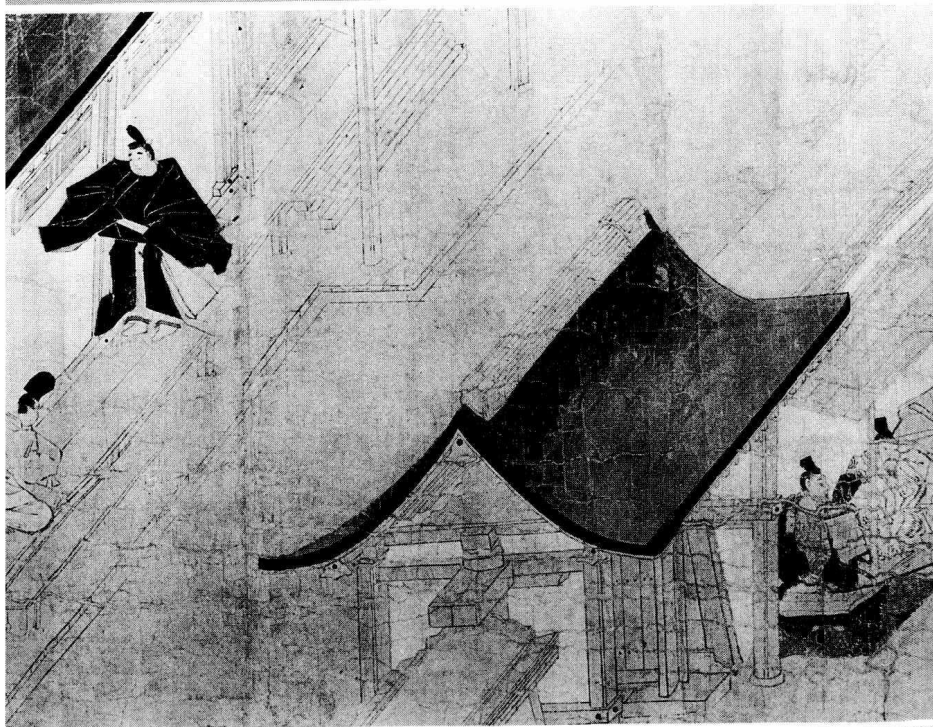
三 末代末法と浄土信仰 172

四 王朝の雪 226

あとがき 259

初出一覧

第一
西行点描



西行物語絵巻「宮中で出家の許可を請う西行」（徳川美術館所蔵）

鳥羽院に出家のいとま申し侍る
とて詠める

惜しむとて惜しまれぬべきこの世かは

身を捨ててこそ身をも助けめ

6 頁参照

一 北面佐藤義清とその遁世

世をのがれて伊勢のかたへまかりけるに、鈴鹿山にて

鈴鹿山うき世をよそにふり捨てて いかになり行くわが身なるらむ⁽¹⁾

鳥羽院の北面に仕えていた二十三歳の兵衛尉佐藤義清が卒然として遁世した原因は、当時も謎で

あったと思われるし、現在でも依然として伝記上最大の謎といふべきであろう。しかし、このごろ私は、掲出の一首などにもその謎を解き明かす一つのヒントがあるのではないか、と思うことがある。

詞書⁽²⁾によって、西行が遁世したしばらく後に伊勢へ赴いたことが分かる。彼が晩年、源平合戦期の七年間を平穩な伊勢国の二見浦^{ふたみがうら}に草庵を結び、内宮^{ないくう}祠官^{しかん}荒木田^{あらきだ}氏の人びとと深い交わりを持ったことは、拙著『西行の思想的⁽²⁾研究』でくわしく論証した。しかし、そのような伊勢との濃密な関係が、

いつどのようにして始まったかを推定することはできなかった。史料によるかぎり、掲出の一首が最初の伊勢行途上の作とみられるのだが、その機縁や目的は詞書に全く記されていない。川田順氏⁽³⁾はこれを遁世三年後の作とし、伊勢・志摩^{しま}を「見物」して後三河の伊良胡崎^{いらこ}へ渡り、さらに遠く陸奥^{むつ}へ脚

をのばしたものと、氏一流の直線的な解釈を下した。論証の手がかりとしては魅力的であるが、今のところ私はとてもそんなに飛躍した推定はできない。⁽⁴⁾

しかし、若き新発意^{しんぱち}の西行が都を去って伊勢路をたどり、歌枕の鈴鹿山^{すずか}で鈴の縁語「ふり」^(振)「なり」^(鳴)を駆使して打ち興じていることは、歌意によってだれにもよく分かる。もつとも、諸家の注釈をかえりみると、かならずしも打ち興じたなどとは解釈されていない。安田章生氏^{あやのし}は、

出家の身となった自らをかえりみて、憂き世を自らに關係のないものとして振り捨て遠くへ行くのだという思いが、しみじみとして味わわれたのである。同時にまた、この後、どのようになっていくわが身なのであろうかという思いが、身をゆさぶるように西行の心に湧いたのである。(傍

点目崎)

と記す。久保田淳氏⁽⁶⁾はさらに明白に、

大悟した高僧だったら考えられないこの不安感^{ふあんかん}がこの歌を生んだのである。(傍点目崎)

とし、山木幸一氏⁽⁷⁾は、

この歌は、世を遁れたころの作で、その決意の反面に、何か追われるような、かりたてられるような不安感^{ふあんかん}がにじんだ歌である。(傍点目崎)

とし、両氏ともむしろ強い「不安感」を強調されている。

ただこれより先、西行和歌に対して精密きわまる研究を試みた窪田章一郎氏⁽⁸⁾は、この歌を「颯爽と

した、明るい風貌に、清新なものを感じとることができる」と、まるで反対の鑑賞をされている。訓詁に熟達しない私には、両様の解釈のいずれが妥当かを判定する資格はないが、思うに鈴の音はりんりと明るく鳴りわたるものであり、たとえば陰々滅々たる梵鐘ぼんしやうの音などとは対照的に心に響くものであろう。西行は鐘の音を、

つくづくと物を思ふにうちそへて 折あはれなる鐘の音かな

と詠ったが、鈴の音をこれと同様にものがなく聴いたわけではあるまい。それ故私は掲出の一首を、同じく遁世間もない頃の作とされている、

世の中を捨てて捨てえぬこちして 都離れぬわが身なりけり

との好対照において読み取りたいと思う。この方は、「世の中を捨てて捨てえぬ」中途半端な心境で、恋々と「都離れぬ」暮らしを続けている苦渋を表明したものだ。これに対して掲出歌は、いまやそうした「うき世」を「よそにふり捨てて」思い切って旅に出た事から、「いかになり行く」かは知らねど、何か新たなものが生まれ出る希望に胸が高鳴ったことの告白ではないだろうか。

鈴鹿山はいうまでもなく、越前の愛発あらかち（のちに近江の逢坂）、美濃の不破ふわとともに三関さんかんの置かれた所であり、それらは遠く平安初期に廃止されたとはいえ、畿内と異なる「外国」への関門がここだということ意識は、都びとの共通に持つものであった。鈴鹿を越えて異境へ出ることは「うき世」を「ふり捨て」ことの象徴なのであって、この一首は単なる地名に寄せた言語遊戯ではなかった。わが遁世の志はここにはじめて定まったと、峠に立って西行は見えわめたのであろう。無論未来が「いかになり行く」かへの不安感が無かったはずはあるまいが、窪田氏のいわゆる「明るい風貌」「清新なもの」、換言すれば西行の中で何かがふっきた事のあらわれを、私は看取したのである。

さて、一首をこのように解釈すると、さかのぼって二十三歳の遁世以来ここに至るまでの数年間の「都離れぬ」草庵生活は、どのような心境で送られたのか、さらには二十三歳の青年をそうした不安定な生活に追いこんだ状況や原因は何であったのかを、あらためて追跡してみたい。

鳥羽院に出家のいとま申し侍るとて詠める

惜しむとて惜しまれぬべきこの世かは 身を捨ててこそ身をも助けめ

この一首は、詞書によれば、北面佐藤義清のいわば正式の辞意表明ということになる。ただし、西行の家集類のどれにもみえず、『玉葉和歌集』卷十八雑歌五に出典がある。そして同集の撰進されたの

は西行の入滅より百二十年以上も後だから、確実性を疑えば疑えるはずだけれども、川田・窪田・久保田氏らがいずれも西行作と見ておられるのは、その声調と内容がいかに西行に似つかわしいと判定されたからであろう。新勅撰以後^{（こ）}殊のほか西行を冷遇した代々の勅撰集の中で、『玉葉集』の撰者京極^{（たか）}為兼は例外的に西行を熱愛し、多くの作を採用した人だから、私も彼の詩眼のたしさを信じたいと思う。

川田氏は「さすがに亢奮してゐる様子で、いささか捨鉢にさへ聞えるふしもある」と評し、窪田氏は「烈しい語調」「荒々しい調べ」は「もつとも西行らしい」「記念碑的作品といつていいであろう」と賞讃されたが、私が蒙^{（も）}を啓^{（ひら）}かれたのは久保田淳^{（ぐ）}氏の解釈である。氏はいう、

従来^{（じ）}の説は、すべて「をしまれぬ」の「れ」を可能の助動詞「る」と解し、「われにとり、をしまれぬべきこの世」と意を取っているようである。しかし、これは受身の「る」で、「われ人にをしまれぬべきこの世」の意ではないか。

と。つまり、「たとえ惜しんだところでわたくしが人に惜しまれるはずのこの世でしょうか、そんなことはございませぬ。それゆえに、身を捨てることによって、かえって身を助けるのでございます」（傍点目崎）という現代語訳になる。だからこれは、「数ならぬ身」や「思ひ知るべき人はなくとも」などの作と同様な「勘^{（かん）}ねた物言いである」というのが、久保田氏の見解である。私はこの見解に脱帽した。まことに、西行はしばしばみずからを「数ならぬ身」と詠っている。

数ならぬ心のとがになしはてじ(てい) 知らせてこそは身をもうらみめ

何とこは数まへられぬ身の程に 人をうらむる心ありけむ

世を厭ふ名をだにもさはとどめおきて 数ならぬ身の思ひ出にせむ

数ならぬ身をも心のもちがほに うかれてはまたかへり来にけり

最初の二首は『山家集』の恋の部に入っている。それでここから、『源平盛衰記』に伝えられた「申すも恐れある上じやうらう 藤女房」との身分違いの悲恋を連想するのもごく自然であろうが、いまはより広く、西行がおのれの出自や官職位階そのものを「数ならぬ身」と、常に強く意識していたものと考えたい。なぜならば三首目の「世を厭ふ」の作は、遁世直前の、

世にあらじと思ひたちけるころ、東山にて人々寄霞述懐といふ事を
よめる

そらになる心は春の霞にて 世にあらじとも思ひ立つかな

に続いて、「同じ心を」として収められた作である。そして久保田氏が言及された、

世をのがれる折、ゆかりありける人のもとへいひおくりける

世の中をそむきはてぬといひおかむ 思ひ知るべき人はなくとも

も、これより一首置いて録されている。これらは、西行が遁世前後に交際のあつた人びとに対して、「数ならぬ身」風の拗^すねた物言いを好んでしていた事実を示すのである。また、四首目は『新古今和歌集』巻十八所収歌で、おそらく遁世後の作であろうが、卑下・自嘲的な意識がなおしばらくは脱けきれなかった名残りでもあろうか。

ここに「自嘲的」と書いたが、たとえば伊藤嘉夫氏もこの歌に頭注して「一種の自嘲的ないひざまである」と記されたように、これは何びとにも自然に感じ取られる響きであろう。西行がそのようなコンプレクスを持たざるを得なかったのには理由がある。それは、

身を捨つる人はまことに捨つるかは 捨てぬ人こそ捨つるなりけれ

の作が『詞花和歌集』に採られるに当って、「よみ人しらず」扱いにされた一点を以てしても証明されよう。義清に並なみならぬ恩顧を与えた崇徳院^{すどく}が藤原頭輔^{あきすけ}にこの集の勅撰を命じたのは、西行遁世の四年後であつた。一首の入集は、院の西行への恩顧を念頭に置いた撰者の格別の好意だつたと思われる

るが、その場合にさえ作者名を明示するのを憚るほど、卑賤の者と目されていたわけである。⁽¹²⁾

久保田氏はこの作にも「惜しむとて」の歌とよく似た言葉の運びがあると見られたが、同感である。そして、顕輔が無名の遁世者の作を一首だけ採るに当ってこの作を選んだことは、当時かまびすしく評判された若き北面の遁世動機を、この居直ったような歌が何よりもよく示していると見たからではないだろうか。では義清は何に對して居直ったのか。

私は「惜しむとて」の一首を手掛りとして、西行遁世の原因を探りつつ、おのずから「数ならぬ身」へのコンプレクスに説き及んだ。ここになお引き合に出したく思うのは、次の一首である。

いざさらば^{さか}盛り思ふもほどもあらじ　はこやが峯^(春イ)の花にむつれし^(てイ)

これは諸家一致して若年の習作と見ている百首歌のうち、「述懐十首」冒頭の一首である。「藐姑射^{はこや}が峯」すなわち鳥羽上皇の御所に仕えるはなやかな生活を程なく捨てようとしている北面義清が、その決意を表明した作であろうとする見解も、諸家おおむね共通である。いま最も精細な久保田氏の言を引く。

「ほどもあらじ」というのは、「盛り思ふもほどもあらじ」なのであって、「盛り」そのものが「ほ

どもあらじ」ではない。けれども、花はうつろいやすいものである。読者の側にはこの表現は、花の盛りそのものがほどなくうつろうことを予見した作者が、その花咲く峯をあとにしようとしているかの感じを与えないであろうか。

久保田氏の見解によれば、この歌は鳥羽院の栄華の、程もなき移ろいを予見したように受け取られかねない不吉な歌で、「とすると、この作は宮廷や仙洞の周辺では公開の憚られる歌だったのではないだろうか」と氏は記されている。

この解釈は氏一流の鋭さに感服させられるが、私は次のように考えたい。西行は鳥羽院の栄華のはかなさをも無論予見したであろうが、その中で「花にむつれし」蝶のように日を送っている自己、自身の、「北面」としての立場のはかなさをこそ、より強く痛嘆したのではなからうかと。私がこういう考へに傾くのは、院北面という存在の特殊なあり方に思い及ぶからである。

院北面についての古典的な論文は、吉村茂樹氏の「院北面考」⁽¹³⁾である。それによれば、北面は院政を開始した白河上皇によって創始された院の近臣であって、御幸ごこうの供奉くふぶを主たる任務とし、付随して御所の警備や院の御使などにも奉仕した。上皇に奉仕する武力には、他にも武者所や御隨身みづじんなどがあつたが、北面が彼等と異なるところは、白河院の「特別な思召しによって院の近臣として採用された輩を、便宜に院御所の北面に候せしめられた事に発したもの」であつた点にある。そしてその「特別な思召し」とは、吉村氏が『尊卑分脉』^{（そんびぶんみやく）}藤原良門流の北面為俊・盛重を例として引かれたように、彼